

第二十回野尻湖クリルタイ

岡田英弘

第二十回野尻湖クリルタイは、一九八三年七月十七日(日)から二十日(水)まで、長野県上水内郡信濃町の野尻湖ホテルにおいて開かれた。参加者は次の五十一名である。

天谷孝夫(岡山大学)、崔起鏞(祥明女子大学校)、海老沢哲雄(埼玉大学)、福島伸介(早稲田大学)、Gomboljan Hangin (Indiana University)、橋本萬太郎(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、橋本勝(大阪外国語大学)、樋口康一(京都大学)、細谷良夫(弘前大学)、池上二良(北海道大学)、石橋崇雄(東京大学)、伊藤幸一(三重短期大学)、神田信夫(明治大学)、菅野裕臣(東京外国語大学)、加藤和秀(東海大学)、加藤直人(日本大学)、河内良弘(天理大学)、川口琢司(北海道大学)、川又正智(国士館大学)、川瀬豊子、菊池俊彦(北海道大学)、北川誠一(同)、北村高(竜谷大学短期大学部)、小林高四郎、小見山春生(慶応義塾大学)、栗

彙報 岡田

林均(一橋大学)、松村潤(日本大学)、宮脇淳子(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、森川哲雄(九州大学)、中見立夫(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、小田寿典(豊橋短期大学)、小谷仲男(富山大学)、岡田英弘(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、岡崎敬(九州大学)、大沢陽典(立命館大学)、佐々木史郎(東京大学)、佐藤道郎(岩手大学)、島田正郎(明治大学)、清水宏祐(東京外国語大学)、新福重明(日本大学)、塩田今日子(東京外国語大学)、都竹武年雄(日本私立大学協会)、都竹通年雄(富山大学)、植村清二(国士館大学)、梅村坦(立正大学)、山田信夫(京都女子大学)、山下智彦(弘前大学)、吉田順一(早稲田大学)、吉田金一、吉田豊(日本学術振興会)、張承志(中国社会科学院民族研究所)。うち、崔(大韓民国)、ハンギン(アメリカ合衆国)、張(中華人民共和国)の三名が、外国人の出席者であった。第一日の七月十七日は、夕食前、現地集合、登録。夕食では参加者の簡単な自己紹介があった。当夜は公式プログラムはなかったが、二階ロビーに人々が集まって、自然発生的なパーティとなった。第二日の十八日の午前は、まず Confessions の第一部があった。

植村は、昨年逝去した前嶋信次を追憶した。小林は四十九年ぶりに中国を訪問、北京、呼和浩特を見た。吉田(金)は『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』を完成。橋本(萬)は北京大学に滞在、中国語におけるアルタイの要素の西北から東南への侵入を研究。森川はウラインバートルの国際モンゴル学者会議でブルニの乱(一六七五年)について発表、「チャハルのブルニ親王の乱をめぐって」(『東洋学報』)、「アムルサナーをめぐる露清関係始末」(九州大学歴史学地理学年報)を出し、『モンゴル研究』に *Quriyangaŋ yu altan tobai* (Gangga-yin unusaŋ, Čayan teike) の近刊本を紹介。菅野は『講座日本語』に朝鮮語について三篇寄稿、延辺大学の招待で訪中、朝鮮族の実状を見聞。清水は、このほどようやく刊行された『内陸アジア・西アジアの社会と文化』(護論集)に「ベルシア語写本『宰相たちの歴史』について」を発表してイラクのセルジュク朝の官制を分析、現在、サファヴィー朝の農書を研究。栗林は『iの折れ』再説(『モンゴル研究』)を書き、『モンゴル語史における『iの折れ』の問題点』を日本言語学会で発表、英文にまとめて国際モンゴル学者会議で “Some problems of i-breaking in Mongolian” を読む。帰って『言語研究』に出た言語学会のペーパーで金田一賞を受ける。「比較言語学の課題と方法」(『一橋論叢』)を書き、賞金で自訳の『モンゴル語の音声と正書法』を記念

出版。北川は前々年から前年にかけて十ヶ月間、コーカサス三国に滞在。川口はティムール朝史、特にアブー・サイードの時代を専攻。天谷は農業土木科で土壌物理学を専攻、一九七七年モンゴル学術調査に参加、塩害問題で学位を取得。吉田(順)はウラインバートルで日本語を教えるかたわら研究した遊牧の諸問題について一連の発表を行っている。張は中国社会科学院民族研究所の歴史研究室に所属。北京大学では考古学を専攻した。時代はチングスから元末に及ぶ。新疆ウイグル自治区の古城址を調査し、アルタイと新疆の連絡路を研究中。日本では東洋文庫に寄留。中見は「キャフタ会議の外交史的研究」をまとめつつある。国際モンゴル学者会議では「日本外交史から見たモンゴル問題」を発表。護論集には「グンサンノルブと内モンゴルの命運」を書く。九月の国際アジア・北アフリカ人文科学会議(CISHAN)では一九一六年のバブジャブの乱について発表の予定。

特別講演(その一)として、島田が「契丹法・モンゴル法四十年」を語った。

島田は『遼律之研究』(大阪屋号、一九四二年)を出してから、もう四十年になる。法律家の家庭に生れ、法に興味を持った。昭和八年、高等学校一年生で始めて中国を旅行した。十一年、東京大学に入る。同級生に前田直典、鈴木中正、田坂興道らがあったが、現在は自分と関野雄、藤田正典

の三人しか残っていない。同年夏、中国を旅行、赤峰を拠点に熱河省を巡り、承德、多倫、五原まで行った。北京に居た父の孫弟子滝川政次郎から「先ず唐律を読め」と教えられた。中田薫の講義「律令体系の成立」を聴くかわら、東洋史では考古学を専攻、北魏の平城、盛楽、趙の邯鄲、魯の曲阜、遼陽の漢墓の発掘に参加した。十四年に卒業、すぐ北京に留学し、十六年に至った。東大考古学科副手から、十七年、東方文化学院研究員となり、二十五歳にして満洲帝国政府に依頼されて遼代の遺跡の調査を主宰し、太祖の奉陵邑祖州城の全面発掘を実施した。その成果は、のち『祖州城』（昭和二十九年）として自費出版した。

東方文化学院で契丹の研究を打ち出したのは、「中国人は、征服者をして自己の法を棄てさせた唯一の国民である」というヴォルテールの言葉に触発されたからである。昭和十九年『遼令之研究』の原稿を完成したが、空襲で印刷所とともに焼失した。終戦後、学院は宇野哲人院長が独力で一年半支えたが、持ちこたえられなくなって失職した。一誠堂に勤務中、鶴沢総明明治大学総長に見出され、明日から法学部で法制史の講義をせよということになった。昭和二十二年のことである。当時法制史を担当していた滝川政次郎は「お前が今日から一人でせよ」と言い、即日辞任した。週三十時間の講義と雑務のかたわら、焼けた『遼令之研究』の復原作業に取

り組み、昭和二十九年『遼制之研究』として自費出版した。しかし契丹法の復原には成功しなかったので、転じてモンゴル法の研究に入り、『モンゴル・オイラット法典』と『ハルハ・シルム』を分析すること二十年、さらに転じて清朝蒙古例の研究に入った。「徹底した実証の職人になる」ことを心掛けてきた。この九月には六十八歳になる。

入手困難な中国の内部刊物は、シンガポールの南洋大学と香港中文大学によくそろっている。台湾では「三法司檔案」の整理が完了し、張偉仁の『清代司法制度之研究』の出版と同時に公開される。この中には順治年間に引用された「盛京定例」の実例があり、これから復原を計画中。「部院檔案」の整理も進行中で、「理藩院檔案」が見つかったと張偉仁から電報があったが、実は銀庫のものであった。故宮博物院には乾隆二十年の「刑科史書」があり、中に蒙古例に依る判例の実例三十六条が見られる。

中食後、遊覧船で湖を一周した。

午後は、Confessionsの第二部と、研究発表（その一）、現地報告があった。

ハンギンは東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所客員教授として一年間滞在中。自己の幼時からアメリカ行きまでの経験を口述、また日本にあるモンゴル文定期刊行物を蒐集。第十七回クリルタイ以後の仕事としてはモンゴル中

世の官号の語原について書き、五万語を収録するモンゴル語辞典の原稿を完成。日本モンゴル学会春季大会とA・A研所内研究会で「中国の文化大革命と内モンゴルの文学」について講演。岡崎は昭和三十年カラコルム・ヒンドゥックシュ探検隊に加わってイランに半年残留。三十二年中国科学院考古研究所の招待ではじめて訪中して以後、十回ほど往復。中国の考古学は文革の影響をあまり受けていない。九州大学は韓国と関係が深く、韓国人の学生が多い。東北に行ったが輯安には行けなかった。細谷は『鑲紅旗檔 乾隆朝1』（東洋文庫）を神田、松村、岡田、宮脇とともに出す。「三藩の乱再考」（『東北大学東洋史学論集』）、「致道館蔵書的一端と『欽定軍器則例』（弘前大学人文学部『文経論叢』）を書き、『中国史研究入門』の政治史を分担。松村は『鑲紅旗檔 乾隆朝1』に参加、護論集に「シュルガチ考」を書き、「清太祖実録の研究」をまとめつつある。岡田は前年夏の「教科書検定問題」に際して、このキャンペーンが鄧小平体制に対する人民解放軍の巻き返しであり、日本とは何の関係もなかったことを「教科書検定」は中国の内政問題だ」（『中央公論』十月号）で論じ、森浩一との対談「倭人伝」をどう読むか」（『倭人伝を読む』中公新書）を行い、今年四月から五年間の予定で、A・A研の共同研究プロジェクト「内陸アジア史文字資料の研究」を開始し、六月三日の第一回会議では範を示す意

味で自らモンゴル史料の性質を論じた。宮脇は『鑲紅旗檔 乾隆朝1』の原稿の校正、およびタイブ印書とその校正を担当。昭和五十四、五年度のA・A研共同研究員としての成果として「モンゴル・オイラット関係史」（『アジア・アフリカ言語文化研究』）を発表。四月からは「内陸アジア史文字資料の研究」プロジェクトの共同研究員。さきに「十七世紀のオイラット——『ジュニン・ガル・ハーン国』に対する疑問」（『史学雑誌』一九八一年十月）で若松寛の説を批判したが、若松が『東洋史研究』で反論したので、五月二十一日の日本モンゴル学会春季大会で「ジュニン・ガル・ハーン国」論争——若松寛氏の反論に答えて」と題して再批判を行い、その内容をまとめて『東洋学報』に投稿した。

研究発表（その一）は、橋本（萬）「青海漢語のアルタイ化」であった。

青海省に声調のない中国語方言があると聞いて、昨秋、半月間、西寧を中心として調査を行った。湟中の塔爾寺（*Tar寺*）と楽都の瞿曇寺で、農民の言語を調べた。地理的に見ると、中国語の北にはアルタイ諸語があり、南にはオーストロアジア諸語がある。このうちアルタイは形容詞が名詞に先行し、目的語が動詞に先行する（*AN, N, ON, V*）が、オーストロアジアはその逆（*NA, V, NO*）である。そしてその中間にくる中国語は形容詞は名詞に先行するが、動詞は目的

語に先行するという形をとる(A+N, V+O)。これは不自然である。しかしよく見ると北部の中国語は、もともと「呉敗越于夫椒」のごとき形から、「呉在夫椒把越打败了」のごとき、アルタイ的なA+N, O+V型に変わってきたのであり、南部においては今なお「魚生」「人客」のごときN+V型が存在している、オーストロアジア的であることがわかる。このうちオーストロアジア的古い層であることは、「帝堯」「帝舜」に対して「文王」「武王」があることから見て、おおよそ周を境に変化したと考えられる。

声調について言えば、アルタイでは存在せず、オーストロアジアでは十から十五ある。中間の中国語について言えば、東干方言がもっとも少く三、北京方言が四。これは平、上、去、入の四声のうち、平声が二つに分れ、入声が消滅した結果である。もっとも声調の多いのが、王力の調査した広西博白方言で十あるが、これは平、上、去がそれぞれ二つ、入声が四つに分れた結果であって、これはタイ語の声調そのままである。江北の漢語の大半はアルタイ系である証拠といつてよい。

遼中で調査した農民は、「詩(shi)」「時(shi)」「使(shi)」「事(shi)」を独立の音節としては区別して発音できなかつた。しかし文中にあつては区別できた。これはもともと声調をもたないアルタイ系人が青海に入って漢語を学んだ際、四

つまでしか受け入れられず、それも文章全体のトーンとして受容したことを示す。さらに青海漢語の特徴は、単語の順序が日本語と同じである。「新荒地頭年肥料哈。(を)上の不要」のように言う。これは『元朝秘史』総訳の奇妙な文体、「這恩子你子孫根前。(に)必回報」「兒子每行。(を)疾快喚覺起來」とよく似ている。恐らく北方中国語の現実はこのようなものであり、青海漢語はそのなごりなのであろう。中央では文言の制約が強くて引きもどされつづけたのであろう。

現地報告は、都竹(武)の内モンゴルと、北川のコーカサスについてであった。

都竹の日本私立大学協会は、内モンゴル自治区からの留学生を受け入れて世話しているが、その定期協議のため、昨年、呼浩特を訪問、四子王旗から赤峰を経てハラチン右旗に連れて行かれた。ここはグンサンノルブ親王が河原操子を招いて毓正女学堂を開いたところである。公爺府に旗公署があり、今は人民公社となっている。霊悦寺に河原操子の写真が展示してあった。旧王府は立派な三門と亭々たる松樹が残り、那拉松蒙民中学になっている。校長のモンゴル語の挨拶を直ちに日本語に通訳し、中間に漢語が入らなかつた。生徒はモンゴル語と日本語を学んでいる。

北川はソ連科学アカデミーと日本学術振興会の研究者交換プログラムでグルジアのトビリシ、アルメニアのエレワン、

アゼルバイジャンのバクーに滞在した。コーカサス三国の国境は極めて複雑に入り組んでいて、自治区や自治共和国の飛び地が随所にある。一九四五年の国境を変更しないというソ連の方針は、対外的ばかりでなく、対内的にも紛争を防ぐ意味があるようだ。

夕食後、都竹(武)と橋本(萬)がそれぞれハラチンと青海のスライドを示した。

三日の十九日の午前は、Confessionsの第三部と特別講演(その二)があった。

池上はウイルト語について「言語研究とゼロ」を書き、『川村秀弥採録カラフト諸民族の言語と民俗』、『私の一代の思い出』(砂沢クラ著、本文アイヌ語、日本語訳つき)を出す。石橋は史学会第八十回大会東洋史部会において「清初のバヤラをめぐって」を発表、阿南惟敏『清初軍事史論考』を評し(『史学雑誌』)、「*1800s*と*1800s*色別との成立時期について——清初八旗制度研究の一環として」(『中国近代史研究』三)、『宮中檔康熙朝奏摺』(滿文論摺)収録の覚羅滿保奏摺——台湾關係記事を中心として」(『台湾近現代史研究』五)を書いた。八旗の旗色は『旧滿洲檔』の原文では天命三年の対明出陣直後にはじまり、それ以前のもは後補である。軍事的な意味では三年、社会制度としては七年に始まりと見られる。伊藤は「現代を見る眼」、『経済学の顔』を書い

た。小田は「竜谷大学図書館蔵ウイグル文八陽経の断片拾遺」(護論集)を書く。川又は『考古地理講座』に都市について寄稿、都市国家の東西について比較研究中。塩田は東京外大朝鮮語科卒業後、モンゴル語を学ぶ。福島はモンゴル帝国期の民族、氏族構造を研究。梅村は中央アジア文献の目録の作成を進行中、G. Karaの講演要旨に著作目録をつけて『東洋文庫書報』に掲載、護論集には「大谷探検隊将来ウイグル銘文木片」を書き、羽田明『中央アジア史研究』を評した。

海老沢は『中国内蒙古学会成立記念集刊』を評し、「一二八五年のアルグン・ハンの教皇あての書簡」を書く。大沢は立命館訪中団で中国を巡り、鎮江を訪れた。小谷は『シルクロード』にガンダーラ美術の解説を書き、東西交流の意義を論じ、樋口隆康論集に石窟寺院について論じた。加藤(和)は文明学科西アジア課程でイラン史を講ずる。

特別講演(その二)は、ハンギンの「文化大革命と内モンゴルの文学」であった。

内モンゴル自治区では、文革で三方乃至七方のモンゴル人が虐殺された。それ以前にはかなりの文化自治権があったが、文革は一切の民族文化財を抹殺しようとして試みた。一九七六年の四人組の打倒以後、事態は急転し、モンゴル人は再び勇気をもって立ち上った。内モンゴルの文学史は四期に分れる。第一期(一九一九〜四九)は五・四運動から人民共和国

の成立まで。第二期（一九四九〜六六）には「党の指導下」に大規模な民族語文学の振興があり、テーマもジャンルも広がり、詩人と作家の層も厚くなった。ところが五〇年代の末期に極左化の傾向が現われ、民族主義を攻撃し、消極的な面を取り上げた作品を非難するようになった。第三期（一九六六〜七六）は災厄の時代で、民族文学は民族分裂主義とされた。第四期（一九七六〜）は第二の発展時代である。これらの時期を通じて、「われらの nuyan（最初の）詩人」と称えられるのが Sayicungya で、内モンゴル現代文学の創造者である。一九四六〜四七年、ウラーンバートルで再教育を受け、Na. Savinoyu と改名したが、一九七三年、文革派の迫害で上海で死んだ。最近刊行されたその『詩選』には、日本留学時代の詩が収録されている。現在も詩は盛んで、『現代蒙古語詩選』には三十六人が収められている。散文の作品のなかで、短篇小説「赤鼻のロドン（Gannar Lodon）」に注目したい。これは一九八一年、『Shiyin yool』第一期に「夕暮れの暖かき（Udesiyin dulayan）」と題して発表されたもので、いま教科書に世界各国の名作のモンゴル訳と並んで、魯迅の「阿Q正伝」の抄訳の次に収められている。内容は無知素朴な木工ロドンと、その大事にする竜を画いた箱の運命を通じて、自治区の成立、大躍進運動、文化大革命の側面を描いた風刺の傑作である。このような作品が中学校の教科書

に堂々と掲載されるとは驚くべきことである。

午後は Confessions の第四部と研究発表（その二、三、四）があった。

加藤（直）は「一七二三年ロプザン・ダンジンの反乱——その反乱前夜を中心として」（護論集）、「天理図書館所蔵『伊犁奏摺』について」（『史叢』）を書く。川瀬は「ハカーマニッシュ朝初期の女性労働者」（『待兼山論叢』）を発表。河内は「李朝時代女真人の朝鮮来京について」（『天理大学学報』）を書く。神田は『鑲紅旗檔 乾隆朝1』を出版、台湾影印の『百二十老人語録』満文の解説を書き、明大で催した周遠廉の講演「清朝の皇族」をパンフレットにする。菊池は「オクラドニコフ先生——その生涯と業績」を書き、中央アジアの遺跡の報告書を集める。北村は小野勝年の著作目録を編し、CISHAN のための大谷コレクションの展示を準備中。小見山は高麗史を専攻、「高麗前中期兵馬使機構に関する一考察」を発表。佐々木はサモイェド族の発展史を研究、「ネネツ族の婚礼」、「ネネツ族のトナカイ遊牧」を書く。佐藤は「アビナバグクタの禪定論」を書く。新福は高麗史を専攻、「一三五〜三六六年の平壤の反乱を研究。崔はモンゴル語を研究。都竹（通）は北陸ユーラシア文化研究会で石勒について話し、前奏の符堅についての作品を企画中。都竹（武）は昭和十七年から二十年までシリーンゴル盟で生活し、同じ

く善隣協会に属する西北研究所で梅棹忠夫を知った縁で、民族学博物館を援助している。橋本(勝)は国際モンゴル学会で『元朝秘史』の言語について発表、「モンゴル口碑文学の一ジャンル」とツングース語の紹介を書く。樋口は蒙古文仏典を言語資料として扱い、チベット語とモンゴル語の言語接触を研究。山下はネパール史、ことにネワール王朝の研究を志す。吉田(豊)はロンドン大学東洋アフリカ学部留学を終えて帰国、ソグド語仏典と、漢訳仏典中に音訳されたイラン語を研究、マニ教経典について BSOAS に寄稿。山田は「日本華僑と文化摩擦の研究——インタヴァーを通じて」、「遊牧封建社会論」(「Formation of the Hsiung-nu Nomadic State」)「古代遊牧民の活動」(「The Origin of the Turks: Their Homeland」)を書いた。

吉田(豊)の「敦煌出土のソグド語文献について」は、一九八〇年以後のソグド語研究を列挙したのち、敦煌出土のソグド語文献について、資料の所在と出版を紹介、内容を仏典、マニ教、キリスト教、占卜、手紙、医書、その他に分類、仏典については観音関係のもの多し疑解が多いことを説き、その一つ「長爪梵志請問経」を復原、解説した。

清水の「中世イランの任侠集団」は、Tarkhi-Sistan に姿を現わす九〜十二世紀の Zarang と Bust の町の 'ayyar の動向を紹介し、これが支配権力にも民衆にもいづく中間的存在

在で、抵抗もするし、掠奪もすること、その理念 Javmardhi (若者たること) が言ったことを行うこと、誠にもとることを言わないこと、忍耐を行うことであったことを述べ、この地に進出して来たセルジューク朝が shahna (shihna、軍政府総督) 職を設け、トルコ人 ghulam をこれに任じたのは 'ayyar 対策ではなかったかと推測し、その分布がササン朝の旧領と重なり、理念が非イスラム的であること、十九世紀以後、'ayyar に代って現われた 'ulu の異様な服装、大食い大会、隠語の使用が、'ayyar と共通であることを指摘した。

張の「王延徳行記と天山礮砂」は、西域の貢品として古来著名であった礮砂(塩化アンモニウム、 NH_4Cl)が北庭の産物として、九八一年、宋の答礼使として西ウイグルに派遣された王延徳の「西州程記」(宋史)高昌伝に引用)にその採取の状況が記されているが、これと全く同じ状況が一九四五年、関士聡によって Jimsar の近くの水西溝で発見されたことを紹介、クチャにも産するが、これをもって王延徳がクチャまで行ったとする松田寿男、長沢和俊の説は誤りであるとした。天山の石炭層はすべてジュラ紀に属し、地下で自然燃焼を起して硫黄、明礬、礮砂を生じ、気化したものが冷たい岩に付着して凝固する。現在では土地の人が礮砂とりを職業とすることは無い。明の『高昌館課』にウイグル語で nosadir とあり、Lauter はこれをソグド語起源とする。

夕食時、初参加者が感想を述べ、食後、北川がコーカサスのスライドを示した。
これをもってすべての日程を終り、第四日の二十日の朝食後、正式に散会した。
今回は梅雨末期にもかかわらず、中二日は晴天に恵まれ、まことに好運であった。

集

報

岡田

第六十五卷

一六五